

家も僕の心の中もモヤモヤだった

じっと、電車であの人と見つめ合ったあの瞬間だ。
偶然だったのか。

あれは、僕がじっと見るので、
あの人不思議がっている顔なのか。

僕が、丹波橋の次の中書島で降りるのを知っていて、
僕の後、席に座る為に、僕の前を選んだのだろうか。

いや、そこまで、気はまわるまい。

あの時、電車が中書島つくまで、
長いこと、僕はじっとあの人を見ていた。

あの人も、一度、目をそらして、
窓の外を見たが、
それでも、じっと見あげる僕の顔が気になり、
また、目を僕の方に向けた。

その後は、僕とあの方は、
ほとんど、目をそらさなかった。

僕は、素直に人の顔を見る。
じっと見る。

そう思っているうちに、
その時のあの人を浮かべながら、
僕は深い眠りに入った。